



地球のいのちの営みと調和、融合して  
共に生き合うコミュニティづくりの情報を発信する

# いのちの森通信



公益財団法人  
いのちの森  
文化財団



Vol. 29  
2014. Jan

平成26年1月1日発行  
編集 山下 薫

発行/ 公益財団法人いのちの森文化財団 〒380-0888長野市大字上ヶ屋2471番地2198 TEL.026-239-0010 FAX 026-239-0011  
ホームページ http://inochinomori.or.jp Eメール zaidan@inochinomori.or.jp

## キミはいよいよジリ貧だ!

さて、特別研究生という恵まれた地位から、転、博士課程不合格、大学追放、それに続く3年半はどん底でした。修士修了即失業!すると、愛の権化とも言うべき目白町教会の木間誠先生は、私のために駆け回って、M学院大学のご友人のH教授を口説いてくださり、夜間部の論理学の週、コマの講義の代講をさせて頂くことになりました。25歳で、とにかくにも大学の教壇です。学生は全員年上の方ばかりでしたが、牛懸命講義すると喜んでくださいました。しかし博士課程をせめて満期退学でもしていなと専任講師になれないと3年目になって知って、どうしたらいいかと、クリスチャンと聞いた東大の助教に相談に行きました。すると聞かれました。「それで、キミ研究の方はどれくらい進んだか?」

## 連載 『ほんとうの自分』とは? どん底から立ちあがる! ～秘められたいのちの素晴らしさ～

### 第五回

馬場 俊彦  
(名城大学名誉教授)



「キミはいよいよジリ貧だ、早いところ方向転換を考えたらどうだ、つまり学究として身を立てることを諦めて、どこか拾ってくれる所を探そう」と「どこか会社でも?」「そうか!」「...貴重なお時間をありがたうございました」。文科・類から出世競争の法学部進学を捨てて純粋な学問の道を選んだ私に「学問の道を探して今を待たせ」とは!帰り道の駅の手前の橋線橋の上で、私は「足を一歩前に踏み出すこと」の意味が分からなくなり、小雨の中で立ちつくしていました。力が抜け、さしていた傘も抱えていた風呂敷包みも落ちて...

## ある夜の絶叫

高校の先生の口を探しましたが、どこもダメでした。M学院非常勤と家庭教師四軒を続けながら、胃潰瘍がひどくなり入院。退院後、ある夜、家庭教師から帰ってドイツ語の哲学の本を読み始めたら、眼が活字の上を滑るばかりで意味がとれません。「僕、学問もダメなんだ」とどうも泣きだしました。「僕は人生の道を踏み誤った。頭が悪いのに哲学なんかに来て...もう取り返しがつかない」と思い、愛用のナイフを手に取りました。焦っていたのか、手首の動脈が分りませぬ。頸動脈は?と探り始めた時、父と母の顔が浮かびました。「いかん!貧しい中から大学にやってくれた両親の血が、無駄に地面に吸い込まれてしまふ!絶対いかん!」同時に石版の奥から小さい声で「ここぞ!死んでたまるか!」という声がありました。「そうだ!」それで、生きるに生きれず、死ぬに死ぬに、どうしたらいいのだ?...その時、フト、今はじき本間先生のある日曜日の講話の一節が浮かんできました。

皆さんの心にヒョップとしてご自分のことを(つまらない存在、居ても居なくてもいい存在)と思っていられしやる方が居られますか、もし居られたらそれは大変な間違いです、それはご自分の眼で自分をご覧になって思う思っつらつしやるに過ぎないのであって、もっと大きな眼、宇宙くらい大きな眼、いや宇宙をお造りになった神様の眼からご覧になると、あなたはななくてはならない大切な方です、なぜかという、神様は、人も無駄な人をお造りでない、どの人にもどの人にもその人でなくては果たせない大切な方

## 自分も神様の作品だ!!

1時間以上続けてくたくたになったとき、またフト思ひ浮かびました。「神様が造ったって?...そんなら、この自分も神様の作品だ、それを「つまらん」というのは失礼だ。僕は自分を「君」と

比べていたのだ。彼は100点、頭も優秀で出版社の息子で恵まれた条件で育った。僕は30点、焼酎屋の倅で頭も悪い...でも両方とも神様が造ったのなら、責任は神様にある。もし「君」がその100を60しか活かしてないなら、怠慢ということになる。僕は30点でもその30点をこれ以上で生きよう、活かしまくつたら、満点だ!文句あるか!」と思つたらその途端、文句なし!!と大声で怒鳴られたみたい心に響きました。「どうだ!文句あつてたまるか!やりやあいいんだろ、やりやあ!!」どこから湧いてきたか、すごい元気が出て来ました。

翌日、八歳年上の友人が僕を見て「何が起つたんだ、キミ、えらい元気がぞー!」「いや、別に...」それまでは「どうだい?と聞かれて「まあ、ナントカ!」と蚊の泣くような声でしか答えられなかった私が、別人のように元気な大声だったので。

ある外人の家を久しぶりに訪ねると「ミスター・ババ何が起つたんですか、ホワットハブドントウユー?」と言われます。「なぜそんなことを言うんですか?」「ユアフットステップス足取り!」と足もとを指して言われます。実際私自身自分に何が起つたか、まだよく分りませんでしたが、とにかく毎日嬉しく不思議な変化が起きます。

内側にも不思議な変化が起ると、外側にも大変化が始まりました。次つぎと新しい出会いが起り、ジリ貧だと言われた私に驚くほどの新しい人生の展開です。その実際は、次回以降に譲るとして、ここでまずハッキリしたのは、人間は表面がどんなに哀れに落ちぶれていても、その奥底には計り知れないいのちの力を秘めている。地球に例えて言うならば表面は固く冷えた殻に閉ざされているが、その奥底には熱いマグマが際見えあれば吹き出ようと煮え沸つているということ(心の構造は地球に似ている。図2)。

私の場合それが大変な勢いで噴出し始めた。そのきっかけは何かという(1)死と向き合った時、父母に済まぬという思いと同時に、「ここで死んでたま

か」という声が心の奥底から湧き上がった。そして

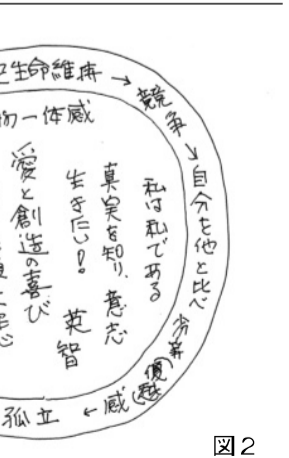
①頭の理解を超えた神に「造った以上責任を取れ」と心の奥底から湧きあがるように絶叫し続けた。そして②「神の作品なら、人と比べる必要はない、自分に与えられた全力を尽くせばいい!」とひらめき、あるがままの自分の大肯定、大安心の中で、心の一層構造の「口他を比べ悩む表層の殻が破れ、深層の燃え沸るいのちが伸び伸びと噴き出し始めた。その鍵は木間先生の「神は、人も無駄な人は造っていない」という真理の言葉が魂の奥底に響き具鳴を起こした事でした。

この全ては、人間の心の深層に秘められた《本人を生かそうとする潜在意識、左脳を超えた右脳、または真(神)我》の不思議な働きと思われまふ。それで、この《ほんとうの自分》の計り知れない素晴らしさをいよいよ深く究め、多くの方々に伝え、表層に欠点だらけのお互いを温かく見守りつつ、共に生きることが私の生涯の願いとなったのです。

ばばとしひこ 1932年岐阜県に生まれる。1951年東京大学文科一類入学。出世競争に驚き文学部哲学科に転進。修士修了するも博士課程不合格。前途に絶望。ある夜自殺寸前から立ち上がり、以後不思議な人生の展開を経験。1966年名城大学就職、理工学部で英語・哲学担当。同大学大学院総合学術研究科・経営学研究科、また愛知医科大学看護学部で人間学を講義。現在名城大学名誉教授。

図1

図2



70歳から90歳までが脳が最も聡明になる？

年を取るごとに一年過ぎるのが早いと言われているが、「実感！」といった昨今である。気が付いたら、そう先がない年齢に達してしま...

さてこの定年なるものは通説によれば定年制を敷いたころの平均寿命が55歳であったから55歳にしたとのこと。現在は65歳が一定年になりつつあるが、平均寿命という観点からいえば80歳が定年ということになるのではないかと...

新しい年を迎えて

～いのちの根源に迫る学びを深める～

塩澤 研一

(いのちの森文化財団 副代表理事)



そのものが、愛と誠と調和をもって進化発展するものであるとの認識がある。本来私たちは大いなる一つの中に存在する...

最近、日本航空を見事に再生させた稲盛和夫氏などを見て、そう思わずにはいられない。もちろん体力的な衰えは若下なりともあるだろうが、日本航空再生に向けた気迫というか情熱というか、使命感というか、およそ凡人とは到底思えないが、稲盛氏自身の言葉を併りれば、「これは天が助けてくれたとしか思えない」と言われる謙虚な姿勢から生み出されたものと言えらる。稲盛氏は常日頃「宇宙の意志と調和する心」を説いておられるが、それは宇宙

さて、本財団に於いては大きな3つの教育文化事業を行っているが、本年は鹿兒島大学稲盛アカデミーの奥健一郎先生をお招きして青少年育成講座を行うほか、長野県内外の招聘講師の先生方による様々な講演講習会を予定している。教育分野、芸術分野、伝統文化、政治経済、農業分野など様々な分野からのアプローチを試みようとされている。学校教育にはない本音の学びを深めたいところである。



奥健一郎先生を交えたプレ勉強会の様子。講義の奥の深さにみんな感動でした。

湿原の復活や外来種の除去なども計画

また自然環境問題については破壊がすすんでいる湿原の復活や外来種の除去などを含めた事業を計画している。長野県は国内に於いても有数の優れた自然環境の宝庫ではあるが、高齢化に伴い自然環境の保全は進んでいない。

さらに戸隠の西には静岡―糸魚川フォッサマグナ(大きな割れ目)が走っており、西日本と東日本を二分する。伊豆諸島が日本列島にぶつかり大きく、一つに割れたことを物語っており、日本列島は緩やかなV字形をなしている。このフォッサマグナの線上には高上・戸隠という霊線があり、宗教・文化の宝庫でもある。

時代とはリーダーの意識に大きく左右される。昨年は伊勢神宮の式年遷宮が20年ぶりに行われ、この資料は長野県の本宮地方のヒノキによって賄われた。交通運搬手段が現在と比べれば極めて困難な時代にあつて、これらの文化や技術が日本全上に広く広がっていったことを考えると人間が作ってきた歴史とはまさしくその時代のリーダーの意識のありように大きく左右されることを物語っている。

「いのちの根源」から発する祈りにも似た希望

こうしたアジアや日本の文化は、遠くはアングロ文明にまで大きな影響を与えていたと言われている。さらに最近では遺伝子による文明の解明が進んでいるが、人類の大本はアフリカに生まれた一人の女性であることが判明しているという。

馬場真光氏が提唱する「貨幣のいらぬ共同社会」とは、まさしく「いのちの根源」から発する祈りにも似た希望なのだと思う。本年は、このいのちの根源に迫る学びを深めてまいりたい。どうか、大勢の方々のご参加を願っています。

2014年 いのちの大学講座 (学長 帯津良一・副学長 巽信夫) ～人生をよりよく生きる～ (日程は変更になることがあります)

- 「がん患者のための合宿養生塾」 講師 帯津良一先生 (帯津三敬病院名誉院長) 2014年 3月28日(金)～4月2日(木) 5月4日(日)～9日(金) 8月22日(金)～27日(木) 11月22日(金)～27日(木)
「いのち学」 講師 帯津良一先生 (帯津三敬病院名誉院長) 2014年 3月28日(金)～4月2日(木) 5月4日(日)～9日(金) 8月22日(金)～27日(木) 11月22日(金)～27日(木)
「生老病死のホメオパシー講座」 講師 帯津良一先生 (帯津三敬病院名誉院長) 2014年 7月19日(土)～21日(月祝) 10月11日(土)～13日(月祝)
「心の探求 ～般若心経の真髄をひもとく～」 講師 宮島基行先生 (高野山真言宗阿闍梨 南山進流声明第一人者) 2014年 1月11日(土)～13日(月祝)、8月
「日常断食」 講師 宮島基行先生 (高野山真言宗阿闍梨 南山進流声明第一人者) 2014年 4月、11月
「心の病とやさしい心理学」 講師 井上弘寿先生 (精神科医) 2014年 6月、10月

- 「脳と心の勉強会」 ～脳と心と体のつながりについて学ぶ～ 講師 久間 祥多先生 (脳神経外科医) 2014年 5月10日(土)～11日(日) 2014年 10月4日(土)～5日(日)
「気功合宿」 講師 中 健次郎先生 (気功家・鍼灸師) 2014年 9月19日(金)～23日(月祝)
< 青少年育成公開講座 > 「君の思いは必ず実現する」全12回連続講座 講師 奥健一郎先生 (国立大学法人 鹿兒島大学 稲盛アカデミー専任教授) 1月24日(金)～25日(土) マザー・テレサに学ぶ愛と平和の心 2月28日(金)～3月1日(土) 西郷南洲翁遺訓を紐解く(1) 3月21日(金祝)～22日(土) 西郷南洲翁遺訓を紐解く(2) 4月25日(金)～26日(土) 中村天風に学ぶ心の探究 5月23日(金)～24日(土) 坂本龍馬の志と生き様 6月27日(金)～28日(土) 聖徳太子の17条憲法を紐解く 7月25日(金)～26日(土) 松下幸之助に学ぶ経営の心の探究 8月15日(金)～16日(土) 井深大のチャレンジ精神 9月19日(金)～20日(土) 吉田松陰の志と松下村塾 10月17日(金)～18日(土) 稲盛和夫の経営哲学を紐解く(1) 11月14日(金)～15日(土) 稲盛和夫の経営哲学を紐解く(2) 12月19日(金)～20日(土) 体験発表とまとめ
日本航空 (JAL) を再建した京セラ名誉会長稲盛和夫氏の珠玉の言葉の数々。その人生体験と教訓を歴代先人達人の教えを交えながら奥健一郎先生からお話しいただきます。
【2014年】 1月 ブレンダ・デーヴィス先生 (英国精神科医) 2月 野村 彰夫先生 (信州大学名誉教授) 3月 山田 研吾先生 (公益財団法人自然農法国際研究開発センター)

- 4月 山下 宗洋先生 (茶道裏千家準教授) 5月 内田 明子先生 (子供の森幼児教室) 6月 馬場 忠寛先生 (芸術家・ギャラリー棟) 7月 小林 由紀子先生 (ボディワークインストラクター) 8月 山田 研吾先生 (公益財団法人自然農法国際研究開発センター) 9月 中 健次郎先生 (気功家・鍼灸師) 10月 宮島 基行先生 (高野山真言宗阿闍梨) 11月 帯津 良一先生 (帯津三敬病院名誉院長) 12月 高野 道隆先生 (会社役員)
「自然観察自然観察」 講師 塩澤 研一 (いのちの森文化財団副代表理事) 信州の美しい自然観察を通して環境問題を考える講座と実習。清掃活動も同時に行う。
「集中内観セミナー」【随時開催】 面接 塩澤 研一 (日本内観学会会員)
「リーダーシップセミナー」【随時開催】 講師 塩澤 みどり (いのちの森文化財団代表理事)
「青少年育成・自立支援個別相談事業」【随時対応】 相談者 塩澤 みどり (いのちの森文化財団代表理事) アドバイザー 医師 巽 信夫 (前信州大学医学部助教授)
「こけ玉グリーンアートセラピー」【随時開催】
「いのちの森の学校」【随時受入】
「シーズンチャレンジボランティア」【随時開催】 長野市社会福祉協議会主催のサマーチャレンジボランティアなどへの協力含む。
「総合的な学習の時間」の支援としての農業体験【随時受入】
※詳細はお問い合わせ下さい
いのちの森文化財団事務局 TEL 026-239-0010

あの日は、朝から雪が降った。とてもきれいな雪だったけれど、津波の被害を受けた人たちは寒くてたいへんなことだろう、なにか私にできることはないかしら、そんなことを思ったのよ。まさか自分が避難民になるなんて考えてもいなかったから。

麻里さんはいつも、雪の話をする。空を仰いで雪を顔に受け止めたのよ、って。

彼女は福島県飯館村の森の中に住んでいた。現在は福島市の郊外の占い借家に避難している。飯館の森に住んでいた頃は、鶏を養い、Hんぼを耕し、ハーブを育てていた。手づくりのジャムや、パン、野菜で食卓は豊かだった。

震災の四年前に連れ合いが、がんで亡くなった。五年に満たない短い結婚生活だった。森には一人の思い出がたくさん生きている。若い頃から精神的な不安定を抱えてきた彼女にとって、森は安住の地、この世で唯一、生きることが出来る場所だった。

彼女はその雪を眺め、灰色の空から落ちてくる結晶体を、きれいだなああと身体で受け止めたのだと、言う。

あることが、測定によって判明する。その線量は私が彼女の森の家を訪れた一年の10月で、およそ30マイクロシーベルト毎時であった。

部屋の中でも、3マイクロシーベルト毎時あった。私が持っていたガイガーカウンターは0.3マイクロシーベルト毎時で警報が鳴るように設定されているため、車中からずっと鳴りっぱなしになり、私たちは苦笑して電源を切った。

そんな線量の高い場所に、毎日のように通い続けている麻里さんを、友人は、心配したのだ。そして、彼女と話をしてくれないか、と相談された。

チェルノブイリ事故の汚染地帯にも行ったことがある。原子力にも詳しい山口さんなら、彼女になにかしらの助言を与えることができるのではないか、と友人は言うのである。

正直なところ、私は自信がなかった。確かにベラルーシの村を訪れてホームステイをしたことがある。原子力の問題にも十一年以上関わっている。だが、私は部外者である。被害も受けず安全な場所に立っている私に、今まさに、自分の身体の一部であった森を奪われようとしている彼女の気持ちがわかるはずもない。

それでも、彼女とメールの交換を始めたのは、現実には放射線の汚染のまっただ中にいる彼女に、純粋に興味をもったからだった。作家のやじ馬根性にはかならない。私は、放射性物質が怖くないんです。だって、森はちっとも変わっていない。家の裏のわき水に棲む山椒魚も生きています。虫も生きている。鳥も生きている。植物も恐れて逃げているのは人間だけだから。



### 《特別寄稿》 福島・魂の表現者たち

田口ランディ (作家)



お金が貰えるなら迷惑料はいただきます。だけど、怒ろうという気にならない。

この森が愛おしいと、彼女は言います。いきものは、けなげだ。いきものは季節を忘れない。この森で、山や鳥や植物と共に生きてい……と。

彼女に、どんな言葉を差し出したらいいのかさっぱりわからなかった。彼女が、人間以外の生命も自分の仲間として感じることが出来る。人間と他の生き物を分けていない。だから、彼女の言葉が普通の感覚の人たちにはうまく理解できない。そのことで麻里さんは傷ついていた。

だが、ある時を境にして訴訟団から降りてしまう。そして、一人の人間としてチツソ木社の前で座りこみを始める。闘うためではなく、人間同士の対話をするために。のちに「チツソは私であった」(窪田房)という書名の本を出版し、水俣病運動の精神的なリーダーとして、今日に至る。

そんな折、福島県で開催される「白河・水俣展」のために、水俣の漁師、緒方正人さんが福島にやって来ることを知った。水俣病患者である緒方正人さんは、かつて原告代表として加害企業であるチツソと闘っていた。

「私は、反原発の人たちが、ここが汚染されたと言っているのが、辛くてたまらないんです。私のような者がいると、まるで放射能が危険じゃないみたいで誤解されると、非難されます。だけど、私はここから離れることができません。人間だけ逃げるといことができません。人間だけだ。」

公益財団法人いのちの森文化財団では  
以下の公益目的事業への寄付金を募集しています

- ①「高齢者のための生きがい創造基金 (死を想い、より良い生を生きる・生と死の統合事業) への寄付」
- ②「青少年の社会復帰と自立のための育成活動への寄付」
- ③「東日本大震災被災地の子供たちの教育を支援する活動 (保育園へのお野菜支援含む)」
- ④「いのちの森の会費 (一般寄付)」

※本財団は特定公益増進法人です。本財団への寄付は税制上の優遇措置が適用され、所得税・法人税などの控除が受けられます。(詳細はお問合せ下さい)

【ご支援の方法】  
▼郵便振替用紙にてお振込みの場合は、振替用紙に寄付先①～④をご記入の上、お振込み願います。  
▼銀行振込み・電信振込みの場合は、財団事務局までホームページ・メール・FAX・電話(1ページ目参照)にて寄付先①～④をご連絡の上、お振込みをお願いいたします。

【お振込み先】  
●ゆうちょ銀行振替口座 00520-3-42181  
●八十二銀行 本店営業部 普通 1093531  
●みずほ銀行 長野支店 普通 1991794  
いずれも名義は「公益財団法人いのちの森文化財団」

「くことだ」それだけだった。「表現って言ったって、いろいろある。喧嘩も表現だ。文章書くのも表現だ。なんでもいい、とにかく自分を表現し続けること、それが生きるということだと思おう」

その日、水俣展の講演で、緒方正人は壇上に立ち、声、こう語った。

「じぶんは、今日、魚たちの代理としてここに来ました」



田口ランディさん著書のご紹介

田口ランディ(たくち らんでい)作家。2000年に長編小説「コンセン」でデビュー。以来、人間の心や家族問題、社会事件を題材にした作品を執筆している。小説以外にも、ノンフィクションや旅行記、対談など多彩な著述活動を展開。2010年より対話のできる世代の育成のため「ダイアログ研究会(明治大学にて)」を開催、多くの参加者を得ている。最新作「フジ」にて(文藝春秋社)「ヒロシマナガサキ、フクシマ」(ちくまプリマ)新書

### 「よそ者」が「身内」になると...

私達は日頃、自分以外の人間を「身内」と「よそ者」というふうに分けて認識しがちですが、それまで敵のように見えていた「よそ者」が何らかの事情で「身内」になると、その人に対する受け止め方が全く変わってしまふことがあります。私自身、小学校時代のクラス替えや勤め先の他社との合併の時など、組織の組み換えに際して度々このような現象に直面し、相手の中身が変わりがないのにその人に対する受け止め方が変わってしまうのは一体なぜだろう? といった不思議に思ってきました。

### 意識の中の境界線

アメリカの現代思想家ケン・ウィルバーは、「白著 無境界」において、世界には「境界」というものは本来存在しないにもかかわらず、人間は赤ん坊から大人になる過程で自己と他者の境界線を意識の中でつぎつぎと狭めていき、それによって他者との緊張関係を増やしていき、と主張しています。このような意識上の線引きは自我の確立プロセスとして重要なのですが、同時に人間を苦しめる源泉ともなり、人間は、白他の境界が幻想にすぎないことに気づくことによって、はじめて全体性を取り戻し平安を得ることができると彼は説きます。

本来境界は存在しない、ということとは、あらゆるものが一体であるということですが、「いのち」は一つ、人類はみな家族」などとよくいいますが、次のような事実を照らせば、これが単なるキャッチフレーズでないことがわかります。

①ビッグバン理論によれば、宇宙は原初の大爆発によって生じ、そこからすべての物質や生物が分かれてきたとされます。これは、すべての生命は元をたどれば一つであることを示しています。

②生物学的にも、ミトコンドリアDNAの解析によって、約十二万年前から二十万年前に存在したアフリカの一人女性(ミトコンドリア・イブ)が人類全体の共通祖先であるということが判明しています。

③人間はふつう自分のことを皮膚に囲まれた身体に取まった人格だと思っけていますが、皮膚と外界の間には「境界」そのものを構成する物質は存在せず、身体と空気を構成する原子が互いに接しあっている状況があるだけです。

④そもそも原子は私達がイメージするような粒ではなく、細かく分解していくと最終的には波動になるといわれています。この世界の真の姿が多くの波動が響きあっているものだとすれば、そこにはいかなる境界を見つけないことも不可能です。

### 脳科学の発見

こうした事実から、私達が通常信じている白他の境界というものはあくまで意識が作り出したものであることがわかります。この点に關し、最近脳科学の分野でも興味深い報告がなされています。サンドラ・ブレイクスリー他著「脳の中の身体地図」によれば、人間の脳には身体の各部位に反応する神経細胞がそれぞれかたまって存在しており、それをもとに脳の「ボディマップ」を描くことができるのですが、この「ボディマップ」には、自己の身体外にある様々な存在(たとえばスポーツ選手としてのラケットや競技場全体、コートを走るチームメイトなど)までもが自在にマッピングされるといわれています。つまり、脳には自己以外の存在をあたかも自己の一部であるかのように感じ取る能力が備わっているのです。また、「白」という認識自体、

## 貨幣も要らない いのちの一体性に 基づく共同社会

馬場真光  
(ヴェリタス総合研究所)



### 社会問題の深層

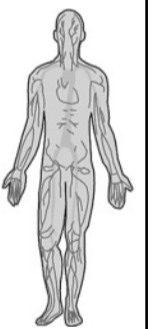
脳に入力される様々な情報が適切に統合されてはじめて生じうるものであり、「白」という存在は本来錯覚にすぎないといわれています。

「境界」とは錯覚であり、すべての存在は本来一つのいのちであるという理解が一般に広がると、社会にどのようなことが起きるのでしょうか。その場合、様々な社会問題に思いもよらない解決の道がみえてくる可能性があります。

例として、昨今懸念されている格差拡大の問題を取り上げてみましょう。世の中にはなぜ貧富の格差が存在し、さらには拡大していくのか? こうした問題はふつう本人の努力の問題だとか、制度に不備があるといった観点から議論されますが、深層にはやはり人間の境界意識が横たわっていると考えられます。すなわち、現代社会では、自分と他者を隔てる境界意識があまりにも強固であるため、「自分の物」を他人に分け与えるということが自然には行われにくくなっています。こうした場合、常識的には当たり前のように思えるでしょうが、その「常識」は、実は先に述べたような分離の錯覚によって支えられているのです。

### 生命的な物流原理とは

では、いのちの一体性が常識になり、物資が自然に流通する社会というものを考えることはできるでしょうか。



そのような「社会」のミニチュア版は人体です。人体内の臓器はお互いに自我を主張し、栄養分を独占したりすることはありません。生命の法則にしたがい血液循環を通して必要な養分が必要となるように流れることで、人体はつつがなく活動することができています。

いのちの一体性が実現している社会のもう一つの例は家族です。家庭の中では概ね必要な物が山由にやり取りされます。特別な事情がある場合を除き、家庭内の日常の物のやり取りに代償が要求されるという話は聞きません。

それでは、社会経済全体がこうしたいのちの一体の原理にしたがって運営されることはありえるのでしょうか? それは社会のメンバーの意識次第です。無償で他人に物を分け与え続けるのは、自分の生存が危うくなるなどの心配が生じるかもしれません。生命の原理に従えば、一時的に不足が生じて、別のところから必要なものが補われるのです。そのためにも必要な条件は、不足に関する情報が共有されること、そして物資を輸送する手段が存在することだけです。現在の宅配サービスの隆盛にみられるように、社会にそうした仕組みを作ることは技術的に難しいことではありません。

社会に経済的安定をもたらすには人道支援のような緊急措置とともに制度自体の改革が必要ですが、より根本的には、社会が「いのち」のありのままの認識にもとづく流動的な物流原理(これを仮に「生命的な物流原理」と呼ぶことにします)が確立されることが最も重要だと思われまふ。

### 貨幣の要らない共同社会

興味深いことに、生命的な物流原理が支配する共同社会では、貨幣というもののさえない必要になる可能性が高いです。

貨幣のもつ機能には、①価値交換機能(物々交換では成立しにくい取引を貨幣が媒介となって実現させる)、②価値尺度機能(物の持つ価値を数量的に示して物と物との交換比率を決める)、③価値保存機能(物のままでは滅失してしまう価値を、将来の交換取引に使えるよう保存する)の二つがあるといわれています。

これらの二つの機能はいずれも(等価)交換という行為を前提としたものであるため、貨幣とは(等価)交換が取引の前提となっている社会において役立つ道具である、ということがわかります。

ところが、いのちの一体性が実感され、生命的な物流原理が浸透した社会では、等価交換そのものが行われません。そのため、貨幣の二つの機能がすべて無意味となります。実際、私が以前訪れた「アズワンコミュニティ鈴鹿」(三重県鈴鹿市)という生活共同体では、過去、独自の地域通貨をつくって流通させていた時期がありました。世帯間の家族的意識が深まるにつれて、取引のつど金額を記録するのが「だんだん面倒になり」、今ではその通貨は廃止され、様々な農産物が自発的に提供され、持ち帰られる商店が登場しています。いのちの一体性が浸透した社会で貨幣が不要となる証左でしょう。

貨幣の要らない共同社会とは、反文明的な社会でしょうか? 自然に近い場所では無農薬の野菜を育て、人と物を分け合いながら安心した共同生活を送る。そんな社会のイメージを原始生活への退歩であるとする人もあるかもしれませんが、しかし、便利な技術をあえて排除する必要はない。技術の進歩がもたらす影響を理解しつつ適切な選択を行っていくべきだと思います。



「すべてのいのちには一つ」という新しい常識のもと、人々が技術の恩恵を受けつつお互いに貢献しあい、物資が自然に流通する社会。それを実現するための一番の鍵は、私たち人間が過去何万年もの間育んできた強固な「境界意識」を少しでも弱め、すべてのいのちが一つであることの実感を深めていくことにあると思われまふ。

馬場真光(まばしんこう) 1962年生まれ。上智大学外国語学部卒。学生時代より人間心理と政治経済の双方に関心をもち、日系、外資系の金融機関で実務経験を積んだのち2011年に退職、ヴェリタス総合研究所を創設。現代の物質主義的な人間観・自然観から脱した新しい政治・経済のあり方をテーマに研究活動中。経営学修士(金融論専攻)、米田ノースウエスタン大学、学術博士(人間学専攻、名城大学)。主要論文・訳書「経済学の基礎としての人間性の理解について」(ヴェリタス哲学の見地から)「2005年中野哲堂先生追悼文集」(共訳)「1987年カトリック中央協議会」

馬場真光氏には、引き続き、強固な「境界意識」を少しでも弱め、すべてのいのちが一つであることの実感を深めていくためにはどうしたらいいのか? ということについて、深めていただく予定です。(編集部)



参考図書「無境界」ケン・ウィルバー 著



参考図書「万物の歴史」ケン・ウィルバー 著